

筆跡が教えてくれるもの

ある催しに応募するために、先日数名の三年生に校長室で個人情報を書かせました。氏名、性別、生年月日については、彼らは難なく書きましたが、住所の郵便番号と番地、固定電話番号については、ペンが止まってしまった生徒がいました。

今の時代の子ですね。要件はスマホで済ませられる時代です。郵便番号や番地を知らないのは仕方がないのかもしれないのかもしれませんが、手紙を出すこともまずないでしょうからね。固定電話よりも、保護者の携帯電話番語のほうが実用的でしょうね。

時代と共に、こういう状況が生まれるのは仕方がないことではないでしょう。今回の応募のようなあることをきっかけにして、知らないことを知ればよいだけのこと。だから、彼らにとって今回の応募は、郵便番号、番地、固定電話番号を改めて認識するチャンスになったと思います。

知らないことは知ればよいだけのことですが、知っていてもなかなかできないことについては、本人の「直そう」とする強い意志が必要です。

三年になると願書等を書きます。実際は、「書き方の説明」「鉛筆で下書き」「正しく記入されているかの確認」「ペンで清書」「提出のための最終点検」という手順を経て完成です。

しかし、これまででも「書き直し」が必要が願書が必ず出ます。なぜなら、これまで取り組んできた「書くこと」が、自分に染みついているからです。

相手がだれであっても、書く内容がどんなことであっても構いなしに自分のやり方で書いてきた者には、文字は「読めればよい」という意識がこびりついています。したがって、一画一画はつきりとした丁寧な文字をいざ書こうとしても、なかなかできません。それが、入試のような大切な時に出してしまうのです。

先週の木曜日、教育実習生の英語の授業を参観しました。その時に、二年B組の教室環境をじっくり見て気付いたのですが、背面に貼られていた各班の掲示の文字のすばらしいこと！すばらしいこと！全ての班の掲示物の筆跡が実に見事で、私は大きな感動を覚えました。教室という公のスペースに掲げられるにふさわしい筆跡でした。

「班活動も積極的に行われているのだからなあ」「班の雰囲気もよいのだからなあ」と想像できました。そして、授業では笑いあり活気あり、そして男女の楽しそうな交流ありで、見ているほのぼのしました。参観者の私にも英語で話しかける生徒もいて、掲示の筆跡がそのまま学級の雰囲気を表していると感じました。

(六月二十一日 記)

